

大谷学会研究発表会要旨

本学学生の体位、生活、栄養の

実態に関する研究

本学教授 瀬戸 進

緒言

現代生活の矛盾の重要なものとして、物的条件の過重視即ち精神面の軽視、それらと並んで各個人の自己内省の等閑視があげられるのではなからうか。心身の発育期にあるものに対し、まず、健康と生命の尊厳性を指導することが第一義諦と思う。

最近では精神と身体との両方にまたがる病気が激増しつつあり、いわゆる心身症が医学界の大きな課題となり、学徒らにおいては「不定愁訴症」やわずかな社会的条件の低下、些少のストレス作用などによって容易に身体の防衛能力を失い、病氣、虚弱、失望、落胆などにおちてゆく者が少なくない。

大学の体育は、全人的な人間形成をねらいとし、身体的、情緒的、社会的に調和のとれた人間性の育成を目標としている。しかしながら、究極的には各個人の自覚ないしは生命に対する認識の諸問題であることから、彼らに対する精神的陶冶あるいは自己訓練などによる自己開発の指導を強化すべきである。これらに対応するための一助として、体育領域の立場より、ここ数年間の実状とほぼ十年程前の数年間の実態から検討して情報を提供しようとするものである。

するものである。

結果と考察・本学が現在と同じ五講時制を採ったのは昭和四三年度からであるが、その翌年の昭和四十四、四十五、四十六年度の三年間と十年程経った最近の三年間の昭和五十一、五十二、五十三年度の資料から検討した。

(1) 学生の構成の比率の推移を入学者数、寺院・在家別割合、現役・浪人別割合、設置者別(国・公・私)割合などから基礎的なものをみようとした。

入学者数では文・短合せて約八五〇名程であったものが約一、二五〇名程と約五〇%の増加をみせ、これは文・短共同比率である。これを少しく詳細にみると、男女の比率では女子が文学部で約三五%であったものが約四〇%と五%程の増加であるが、他の文科系の単科大学や教育系の大学と比べて少い傾向であり、六学科縦割制によるものとも思われる。

寺院・在家別では約三五%が寺院出身者であったものが二〇%を割ろうとしている。しかも実数においてもかなり減少している。設置者別では文学部で私学が二〇%以上であったのが一五%を割り、浪人が三五〜四〇%から四五%を越えようとしている。これらを総合してみたとき、全国的な進学者率の増加もさることながら、平均化が進んでいることは認めなければならぬだろう。その中において、独自性を維持し、個性化を強調しようとするならば工夫が望まれる。その意味で本年度から実施した横断クラス制もその一つとして評価されよう。

(2) 身体資源として体格と運動能力の關係からみると、体格では十八歳で全国平均値と比較するとき、男女共に身長、体重でわずかに劣っていたが、最近では身長は男女共にやや優れているが、

体重では男女共にやや劣り、都会型の傾向がみられている。

運動能力は文部省のスポーツ診断テストのうち十二項目を昭和四十四年度より実施しているが、筋力系、敏捷性、循環器系（踏み台昇降、持久走）などにおいては男女共に、いずれの時期も、全国平均値より劣っていることは体育の指導上の今後の課題である。筋持久性や呼吸器系では全国値よりも優れ、最近数年間の方が向上している。スピード系においては全国値と同じ水準で、最近のが優れている傾向にある。以上のことから、自らオーバー・ロードして追い込み、克服して成就しようとする志向性の不足がみられた。

(3) 生活内容と健康度をみるために、タイムスタディ法によって調査し、昭和四十四年度と五十二年度を一〜三回生の混合型資料として比較した。

生活時間構成を平日からみると、起床時間では男女共に約三十分遅くなっているが、これを通学時間でみると三十〜四十分短縮されている。これは自宅通学者が減って下宿者が増えていることにも符合する。それにひきかえ勉強時間は約三十分減り、男女共約八十五分であった。これらから生み出された時間が、自由時間のテレビなどの視聴覚娯楽や教養・談話・ゲーム娯楽及びクラブ活動時間に配分され、自由時間で男子約四十五分、女子約九十五分増の約四時間で、クラブ活動では男女共に約二十分増の一時三十分〜二時間であり、俗にいわれている学生生活のレジャー型あるいは大学サロン型への変貌化ともみられる。

就寝時刻では二十四時以降に寝た者即ち午前様は男子で約六一%、女子で約四五%であり、これは京都の他大学とほぼ同じ傾向であった。

就寝時刻と健康調査の関係から不定愁訴の発現率をみると、二十四時前に寝た者では約三〇%しか訴えていないのに対し、二十四時以降では約七五%、午前二時以降では九五%以上の者が訴えている。

(4) 栄養摂取状態についてみると、摂取熱量では男子は約二、五〇〇カロリー、女子は約二、〇二〇カロリーで、二十歳の所要量とは同じであるが、十八歳の所要量には不足している。消費熱量では男子は約二、四五〇カロリーであったものが約二、四一〇カロリーとやや減少し、女子でも約二、一一五カロリーが約二、〇一〇カロリーとやや減っていた。熱量の出納からみてももう少し摂取熱量を増加したい。

栄養素別では所要量を満たしているのは蛋白質、脂肪、鉄、ビタミンAとCであったことから、栄養のバランスの改善が望まれるが、自宅者が良いことは示唆を与えている。

『御文』の「あさまし」について

本学助教 鈴木幹雄

一、蓮如は『御文』の中でしばしば「あさまし」という言葉を用いている。そしてこの言葉は、例えば、「それ当流親鸞聖人のをしへたまへるところの他力信心のをもむきといふは、なにのやうもなくわが身はあさましきつみふかき身ぞとおもひて、弥陀如来を一心一向にたのみたてまつりて……」（二帖八）という文に示されているように、真宗の信心に伴う自我感情をあらわしている。この文が蓮如の信心を語るとともに、真宗門徒の信心の範例